Marcin TATARCZUK

京都の「魔界観光」
一条戻橋の歴史とイメージの変遷をめぐって

はじめに

人間は、昔から「死」と密接に関わってきたが、多様な社会的・科学的発展の結果、死後の世界や死と関わる迷信を信じなくなってきた。ある意味で人間の日常生活から「死」が消えてきた。それでも、人は、死を忘れることはなく、本能的に死を恐れている。そのため、死が昔とは違う形で、人間の生活に入り込み、特に10年ほど前から観光産業として人気を集めている。

それは日本、特に京都で見られ、超自然的で、死から来る恐怖を感じる歴史的な場所を対象とする観光が行われている。その場所は、何百年に渡って、絶えず不愉快で怖いと思われていたが、最近、特にメディアにより注目を集め、人気の観光地になってきた。ガイドブックでは、総称で「魔界」と呼ばれることもある。このタイプは日本、特に京都を消す特有の観光の一種と考えられる。このような場所が訪問され、はやる理由はいくつかある。まず、日本の社会は、西洋文化圏の社会と違って、死や俗信とそれほど離れておらず、京都では、伝統が守られ、人の生活とつながっていることである。そして、日本人は、メディアの影響力に弱いことも言える。さらに、戦後の日本国家は、日本を無宗教で平和な国にしようとしたからこそ、正式なレベルで日本人の生活から儀式的な死が消えた。その穴を埋めるために、日本人は、特有の死と恐怖と神秘に関わる観光を生み出したとも考えられる。西洋と異なる近代化も、戦後に起こった社会変化も、それに影響していると言える。

京都は、これまで様々な伝説の舞台となってきた。日本では、その伝説に着目し、研究している学者が少なくない。特に、平安時代に生きた陰陽師の安倍晴明（921−1005）と、彼に関わる場所の研究が盛んである[1]。西洋では、安倍晴明の研究以外にも、日本の伝説や、日本の鬼についての論文が発表されている[2]。しかし、京都における、死や怪異現象と関係する場所の人々の捉え方についての論文や、そういった場所を観光学の観点から扱う論文は、まだないと言えるだろう。

---

[1] 晴明神社編『安倍晴明公』（2002）や田中貴子『安倍晴明の一千年』（2003）など、参考文献を参照。

[2] 特にNoriko T. Reider（マイアミ大学）が鬼と伝説について論文を多数発表している。参考文献を参照。

そこでこの論文では、「魔界」京都をはやらせた小松和彦の『京都魔界案内―出かけよう、「発見の旅」へ』を参考にしながら、江戸時代（1603－1867）に出版された『都名所図会』（1780年）と、日本の刊行雑誌で最長の歴史を持つ『旅』[3]、そしてポップカルチャーとのつながりを強く持つ雑誌『るるぶ』[4]を用い、一条戻橋の観光の歴史を考察してみたい。

京都は、平安京として794年に桓武天皇（737－806）の命令で作られ、平城京と長岡京から遷都された1200年余りの古都である。山に囲まれ、東の鴨川と西の桂川の間に置かれた平安京は、中国の 長安城（チョウアンチョウ） をモデルにし、繁栄を願い、四神相応（しじんそうおう）[5]という風水に従って、設計された都市である。様々 な時代に戦争や洪水、火災のような災害に遭っていたため、建物が消えたり、移動されたりして、町の構造も改造されてきた。それでも歴史的な名前や地名が残り、伝説や歴史上の場所が人間の記憶の中で生きている。

京都は、天皇家の町でもあり、武士の町でもあり、町人の町でもあった。長い間、日本の政治や文化の中心地であった。現代は、世界的に有名な観光地となり、国際交流や文化財保護の場として重要な役割を果たしている。

1. 京都の観光化と「魔界」

京都の観光の歴史は、近代より前、江戸時代（1603－1867）まで遡ることができる。その頃、観光は、現代のような娯楽というよりも、聖地へ巡礼する形であった。巡礼者が京都の寺社を目指し、やって来ていた。それ以外に、街道を使って上京した商人もいたと考えられる。その人たちのために案内図会が作られた。初めての案内図会は、1780年の『都名所図会』である。あまりの人気で、その続編の『拾遺都名所図会』も、1787年に出版された[6]。後に、京都を紹介する他の名所図会も、他の町の名所図会も登場する。それに基づいて、現代とは違うけれども、江戸時代にも京都は、特別なところと思われ、全国の人々が訪れる場所だったと考えられる。

現代の観光の面で、国内外で京都は「日本の中の日本」、または「一番日本らしいところ」だと思われている。言い換えれば、平安時代（794－1192）から続い

---

[3] 『旅』は、1924年から2012年まで発行されていた旅行雑誌である。1924年から1943年まで日本旅行文化協会から、1946年から2003年まで日本交通公社(後のJTB)から、2004年から2012年まで新潮社から刊行されていた。日本最古の旅行雑誌である。

[4] 月刊『るるぶ』は、1973年に「見る・食べる・遊ぶ」をキーワードに、若い女性のための旅行情報専門誌（季刊）として日本交通公社（現在のJTBパブリッシング）が創刊した。1974年10月号からは隔月刊、1976年4月号からは月刊となり、1997年10月号で休刊となった（日本交通公社 旅の図書館サイトより、http://www.jtb.or.jp/）2013年09月23日。

[5] 四神相応 ― 四神に応じた最も貴い地相。東に流水のあるのを「青竜」、西に大道のあるのを「白虎」、南にくぼちのあるのを「朱雀」、北方に丘陵のあるのを「玄武」とする。官位・福禄・無病・長寿を併有する地相である。平安京では、「青龍」が鴨川で、「白虎」が木嶋大路で、「朱雀」が巨椋池で、「玄武」が船岡山となっている。（足利 1994: 28-29。）

[6] 都名所図会研究会 1967: 3。

て、特に平安文化を示す「みやび」文化を保ってきた場所である[7]。問題は、現在では京都にも古いものがないということである。「みやび」文化がアピールされているが、その時代に遡れる建築物などがもう存在していないと言われている[8]。最古の建物でも千本釈迦堂（1227年）である[9]。それ以外の建物は、豊臣秀吉（1536－1598）が都市改造（1587年頃より）を行う際、造られたものである。それでも京都は、その後、何回も焼けてしまう。京都の千年の歴史は、破壊と再建の繰り返しの歴史である。

観光客は、京都のイメージを持ち、それを確かめに来るが、実際の京都には、日本伝統文化を思わせる場所が少ない。街自体が現代都市なので、観光地以外の道を歩いても期待されている伝統文化は見られない。宣伝された場所以外に、京都の歴史的な雰囲気を味わうには、事前学習が必要である。歴史と関わる場所があっても、一目で分からない場合が多いからだ。そのため勉強してから、京都の街を歩くとやっと各々の人がイメージした千年の都に見えてくる。

皆が求め、宣伝されている京都の「みやび」のイメージは、実は近代に作られている。明治時代（1868－1912）に入ると、京都に住んでいた天皇と皇族が東京に移る。公家や幕末の政治家も皆東京に行ってしまう。その結果、京都は奈良のように衰退すると恐れられていた。それを避けるために、最初の段階では、京都を近代工業都市にする考えがあったが、すでに工業都市になっていた大阪に圧倒された。そのため方針を変え、歴史・芸術・学問などを京都のために活かすことになる[10]。

近代国家を目指していた日本は、世界に立派な伝統を持っていると見せたかった。東京は江戸として300年の歴史を持ったが、西洋の帝国から対等に見られるにはもっと古い歴史をアピールしたかった。日本の国家や権力が立派な歴史と文化を持っていると主張するには、もととなるものが必要だった。そこで京都を天皇の即位する場所（1889年の皇室典範）として決めることで過去の伝統とつながりが作られた[11]。しかし、それを実現するには、京都を古都らしく見せる必要もあった。国家側が京都に投資をすることになった。大規模な工業都市化がうまく行かないと気付いた人たちと、国家が求めていた古都の考えが同時に発生し、京都を「歴史都市」として再生することになった[12]。

京都の再開発は、「京都策」と呼ばれ、槇村正直(1834 － 1896)、北垣国道(1836 － 1916)、内貴甚三郎(1848 － 1926)、西郷菊次郎(1861 － 1928)によって考えられ、実施された[13]。京都府の二代知事の槇村正直、そしてその引継ぎで三代知事の北垣国道は、勧業政策・開化政策を推進した。それに伴い、1898年に京都市の最初の市長に就任した内貴甚三郎と、1904年から二代目の市長に就任した西郷菊次郎が京都策を完成させた。京都策は三期に別けられていた。第1期には、1881年まで西欧の新技術を導入し、小学校が作られる。第2期には、1895年まで琵琶湖疎水建設を中心に開発が行われる。第3期には、1910年代にかけて、

---

[7] 丸山・伊從・高木 2008b: 5。
[8] 同上。
[9] 『京都魔界めぐり』1998: 30。
[10] 京都市 1980: 194。
[11] 丸山・伊從・高木2008a: 230。
[12] 丸山・伊從・高木2008b: 4–5。
[13] 京都市1980: 18–24。

道路や上水道などのインフラ整備が行われる。それ以外にも、京都の最初の民選市長であった内貴甚三郎は、市域を拡大することと共に、風致保存の必要があると思っていた[14]。その結果、東山一帯を風致地区に指摘し、北にある西陣をそのまま継続させ、北西を文京地区にし、西を開発する土地に選んだ。内貴甚三郎にとっても、近代工業化だけだと京都を立派な都市にするには足りないと感じたのだろう。だから東山周辺の歴史を保護することにしたと考えられる。

歴史都市をアピールするときに使う京都の寺社は、始めに廃仏毀釈[15]により壊され変革された。しかし、国が日本文化に対する考えを変えるときに、京都に多数存在する古美術・文化財をどうやって近代化する日本に位置づけるかが問題となった。それを考えた中心人物は、啓蒙思想家である 福沢諭吉（1834 – 1901）の弟子で、帝国博物館総長と貴族院議員の 九鬼隆一（1850 – 1931）であった[16]。彼が、日本美術を理論し世界に広めた 岡倉天心（1862 – 1913）と、帰化したアメリカの哲学者・美術研究家のフェノロサ（Ernest Francisco Fenollosa, 1853 – 1908）を登用した。岡倉天心は英語で本を書き、外国人に日本美術を紹介し、世界に認められるようにする。そして外国人であるフェノロサが日本美術について語ると、西洋人が日本の文化を評価しているという構図ができあがる[17]。そのやり方で、京都にある寺社、伝統を保護する理由ができて、意味づけられた。

京都を「歴史都市」に変身させる動力のピークは、1895年に開催された平安遷都の千百年紀念祭である。また、同時に第四回内国勧業博覧会もセットで行われた。両方を支援したのも国家であった[18]。記念祭のために平安時代の大内裏をイメージし、平安神宮が建設された。遷都をした桓武天皇がそこに祀られ、主な神事として時代祭が作られた。当時の京都にはまだ江戸時代の雰囲気が残っていたが、立派な文化を見せるために、さらに昔との繋がりをアピールする必要があった。平安神宮を建設することで、京都を平安時代の色に染めようとしていた。または、桓武天皇ゆかりの寺社や名勝旧跡の修繕・保存が京都市費から補助された。対象となったのは31件で、熊野神社・坂上田村麻呂の墓・神泉苑・長岡京遺跡などであった[19]。

その時に作られて、平安時代と繋がる「みやび」の文化が、京都の新たなイメージとなった。そのイメージに少しずつ他のものも加わるようになり、特に古典文学と関係する場所が訪れられるようになった。戦後になると、京都中のそのような場所や寺の入口に、案内の看板（駒札）が1955年までに立てられた[20]。京都府の教育委員会におり、戦時中府下社寺の文化財の悉皆調査を行っていた日本史の先

---

[14] 京都市1980: 73

[15] 明治初年の仏教排撃運動のことである。1868年に神仏分離令が出されたのをきっかけに、神道家などを中心に各地で寺院・仏像の破壊や僧侶の還俗強制などが起きた。（『広辞苑』1998）

[16] 『京都魔界めぐり』1998: 37。

[17] 同上。

[18] 京都市1980: 135-136。

[19] 京都市 情報館のサイトより（http://www.city.kyoto.lg.jp/）2013年09月18日。

[20] 『京都魔界めぐり』1998: 46。

生の 赤松俊秀（1907 – 1979）が京都大学に帰ってから、学生・大学院生にその看板を書かせた[21]。1955年以降は、日本では、高度経済成長の時期になり、新幹線も通り、オリンピックも開催されるので、京都は全世界の観光客によって溢れてしまう。その中で、観光客を相手にしなければならないし、古都京都のイメージを分かりやすく教えるために看板が作られたと考えられる。

平安時代のイメージ以外にも、祇園や舞妓、茶道、京都の職人によって作られるものも人気を集めるようになった。昔から、京都に多くの職人が住み、ぞれぞれのものを作り続けている理由は、京都が田舎の特徴とされるものを持っているからだ。その特徴とは、代々特定の役割を果たしている家族や、神社に祭祀を行う人々に、外からの者はなれないことだ。なぜなら、その特権は、その地域に生まれ、代々住んでいた人の血を受け継いだ人にしかないからである。京都にもその特徴がみられる。京都を訪れる人や、京都に移住した人は、いつまでもよそ者扱いされるため伝統的な職業に就かず、神社の祭事にも参加できない。だからこそ、京都の人は外の者と混ざったりせず、京都には昔からの伝統・考え方・信仰が続いている。

明治時代から京都を日本文化の象徴的な都市にするには、無数の人々の努力が必要だった。町が拡大され、整備され、観光客が訪れやすいところに変わってきた。国際的にも知名度の高い場所となり、日本に来るとき必ず見に行く都市となった。そしてついに、1994年12月に開催された第18回世界遺産委員会（World Heritage Committee）において、京都が「古都京都の文化財」としてユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の世界遺産リストに登録された[22]。

「みやび」の文化を作り上げるときに、排除され見えなくなったものが多い。朝廷や公家の文化と、彼らによって作られた秩序に反対する動きや、京都住民の周りで起こっていた事故・災難・犯罪、また、はやっていた病気を知ることが、この町を今までと違う観点から見る上で、重要である。それらそのような裏の話や物事を、日本の文化人類学者、民俗学者の小松和彦が「魔界」（または魔界境界・魔界空間）と呼んでいる。この言葉を、「みやび」の文化と対立している裏の文化と歴史と位置付け、小松氏は内藤正敏との共著『鬼がつくった国・日本ー歴史と動かしてきた「闇」の力とは』（光文社カッパ・サイエンス、1985年）の中で、初めて焦点をあてた。京都人は「魔界」という言葉を口にしなくても、そのような裏話を今でも知っている。つまり京都人の記憶の中では、不可思議な出来事や怖い話がまだ存在し、「魔界」とつながる場所が簡単に思い浮かぶのだろう。

観光雑誌において、小松氏が述べている京都の「魔界」に類似している考えが初めて登場するのは、全国で読まれ、JTBが出版していた月刊『るるぶ』の1992年11月号である。西宮市に本社を持つ二十一世紀社の企画である[23]。記事のタイトルは「ミステリー・スポットガイド　京都トワイライトワールド」で、その中で、京都は

---

[21] 同上。

[22] 京都市 情報館のサイトより（http://www.city.kyoto.lg.jp/）2013年09月18日。

[23] 1993年に二十一世紀社が『京都再発見―京都人が選んだこだわりガイド』を出版する。『るるぶ』で掲載された記事の1年後となる。普通のガイドブックと違い、観光名所を避け、味や商品、雰囲気が気になるスポットを紹介する本である。

「呪術都市」と「異界都市」と呼ばれている。著者がトワイライトワールド京都を「京の歴史は日本の歴史であるが、闇の歴史でもあるのだ」[24]と説明している。この記事では、京都のあらゆる怖い場所や、不思議な場所が簡単に取り上げられ、現代的な幽霊が出現する「心霊スポット」（東山トンネル、深泥池）、昔から信仰を集めている寺社（珍皇寺、貴船神社）、雷・電気・原子核の神様がいる法輪寺、マジックマッシュルームが生えている大文字山を消すが紹介されている[25]。二十世紀社も、小松氏が「魔界」と呼び、アピールし続けた京都の新しい魅力に気付き、もう一つの京都を紹介しようとしていたと考えられる。

近代都市で、日本文化（みやび）の代表の町・京都というイメージは明治時代に作られたが、それから百年後には、それがもう機能しておらず、京都を更にアピールするには、何か新しい戦略が必要だと小松氏は考えていた[26]。1993年12月5日に、京都の貴船で開かれた座談会に参加した3人の学者（高橋昌明、深沢徹、田中貴子）が、遷都千二百年祭（1994年）に合わせ、「魔界」都市京都をアピールすることを考えた[27]。それから小松和彦が中心となり、研究と出版を通して、その概念をはやらせ、近頃の京都の「魔界」観光の流行に貢献したと考えられる。

「魔界」についての記事は、旅行雑誌にはあまり出てこないが、ガイドブックと本の市場において、出版数はますます増えていく。1998年からは少し増加し、2000年代に入ってから次々と出版されるようになる。それを後で説明する安倍晴明のブームと結びつけることもできる。また、90年代後半からインターネットが普及し、情報伝達がさらに簡単になった。これにより、誰でも「魔界」についてのページを見て、情報を得ることができるようになり、更にブームは拡大する。テレビはもちろんのことだが、近現代を考えるときには、インターネットが果たしている重要な役割も忘れてはいけない。

近頃、京都を日本伝統文化「みやび」のために観光するのではなく、事前に調べ知ることが必要で、1200年の京都の歴史の中で、あまり注目されてこなかった場所を観光する人が増えている。その場所は、一目では分かりづらく、昔から、怖くて暗く、死と関わりもあり、摩訶不思議であると思われていた。このように人気を集めている観光方法は、日本独自のものと考えられる。さらに、全国でこの観光のスタイルが見られるが、一番強く現れているのは、観光都市の京都である。「みやび」文化のイメージに合わず、注目されなかった所は、小松和彦が呼んでいる「魔界」京都と思われる場所である。その代表的なところは、平安時代から同じ場所に架かっている 戻橋（一条戻橋）や、京都の中心部から鴨川の向こうにある六道珍皇寺とその周辺（六道の辻）や、北野天満宮や、貴船や、耳塚などである。これから一条戻橋を取り上げ、京都の「魔界観光」を考察する。

---

[24] 二十一世紀社1992: 65。
[25] 二十一世紀社1992: 66。
[26] 『京都魔界めぐり』1998: 108。
[27] その座談会の記録は、『京都魔界めぐり』（1998年）に収録されている。

2. 一条戻橋

一条戻橋は、京都市上京区一条通で、堀川に架かっている橋であり、平安京建設のときに架橋された。現在まで戻橋は何度も作り直されているが、それでも橋の位置は変わってない。

かつての大内裏の北東[28]に当たり、その北側にあった葬送の地への道でもあった。その関わりから、橋の名前の由来を紹介する伝説も誕生した。その伝説は、鎌倉時代(12世紀末-1333年)中期に作られた『撰集抄』に記録されている[29]。 918年に三善清行が急に亡くなったので、熊野で修業していた息子の浄蔵は、父と会いに急いで京に帰ることにした。一条の橋に着くと、葬列が橋を渡るところだった。浄蔵は、葬列を止め、死んだ父にもう一度会いたいと強く願い祈った結果、父が蘇生した。それ以来この橋は「戻橋」と呼ばれ、あの世からこの世へ霊魂が戻ったことを今に伝えている[30]。なお、一条通は、10世紀末に戻橋路と呼ばれていたので、橋名がだいぶ古いと想定できる[31]。

その後も戻橋は、不思議な話の舞台となっている。他の有名な伝説は、屋代本の『平家物語』の「剣巻」に載っている[32]。平安時代の英雄の一人であった渡辺綱が夜中に戻橋を通るときに、東詰で若くて美しい女性に会った。彼女は、夜も更けて恐ろしいので、五条にある家まで送ってほしいと頼んだ。綱は女を馬に乗せたが、しばらくしたら彼女は家が五条ではなく、京の外にあると言い出した。そのとき女は鬼に変貌し、綱の髪をつかんで愛宕山へ飛んで行こうとした。綱は刀を抜き、鬼の腕を切り落とした。鬼は逃げたが、渡辺綱が腕を持って、優秀な陰陽師の安倍晴明に相談することにした。晴明は、その腕を封じ、仁王経を読めと教えた。渡辺綱は腕を自分の屋敷に置いた。数日後、鬼が綱の養母に化け、彼の家に入り、腕を奪い去った。

一条戻橋は、昔から橋占が行われる場所でもあった。辻や橋は、言霊の霊力が強く働く場所とされていた。境界となる所なので、異界、つまり普段見えない世界が露呈し、未来の出来事をのぞくことができることで、橋占と辻占が行われていた。橋占の場合には、橋のたもとに立ち、橋を渡る人の言動によって占う[33]。鎌倉時代の『源平盛衰記』では、高倉天皇の中宮建礼門院が子供を産むときに、その母が戻橋の東のたもとで橋占を行った[34]。そのとき、12人の子どもが手を叩きながら橋を渡り、生まれた皇子(後に壇ノ浦で死んだ安徳天皇)の将来を予言する歌を歌って、風のように去っていった[35]。または、同じ『源平盛衰記』で安倍晴明が使っていた式神を一条戻橋の下に隠したと書かれている。晴明の妻が、この式神の容

---

28 悪いものが出入りするため、不吉とされていた方向に当たり、「鬼門」とも呼ばれる。
29 高橋1992: 6。
30 同上。
31 同上。
32 『京都魔界めぐり』1998: 164。
33 高橋1992: 8。
34 同上。
35 小松2002: 46。

貌が醜いと恐れたから、そこに置いておくしかなかった。必要なときに呼び出し、人に乗り移らせ、吉凶の占いをしていた[36]。

占いをしていた陰陽師たちは、戻橋周辺で集まっていたと想像できる。室町時代（1336-1573）の『義経記』によると、戻橋のたもとに陰陽師の鬼一（きいち）法眼が、城郭のような居を構えていた[37]。また、橋の下に式神を隠した安倍晴明の邸宅も、戻橋の近くにあり、現在の晴明神社に当たると言われている[38]。

三善清行蘇生の伝説と、渡辺綱が鬼に会う伝説で浮かぶ一条戻橋のイメージは、この世とあの世の狭間にあり、死を思わせる怪しげで暗い場所である。葬列が通る悲しい場所だが、同時に死に勝って蘇生が可能な場所である。人に希望を与えるところである。こんな場所に恐ろしい鬼が、英雄の命を狙いに現れるが、人間である綱が、あの世から来たものを退治することができた。鬼の力に劣るはずだった彼が、自分を守り、鬼に勝ったというイメージがこの橋に込められている。他方では、その恐ろしくて不思議な力を利用し、人々のために運命を占う占い師（陰陽師）もいる場所であった。あの世から流れる力を治め、使いこなすには、陰陽師が持つ特別な知識と能力が必要だった。橋下に式神を隠し、自由に操れた安倍晴明はそのような陰陽師であった。鬼に勝つ特別な力も、占いをし、鬼を使う力も、一般人が持てる能力ではないが、それでもそれができた者が人間であり、他の人間のためにその力を使っていた。戻橋は、危なくても、人間が魔物に勝つ場所であり、その不思議な力を抑える場所である。

一条戻橋のイメージは、時代によって左右するが、たいてい恐ろしい場所であることに変わりがない。安土桃山時代（1573－1598）には、戻橋の近辺は、人を死刑し、首をさらす場所だった[39]。1544年に、三好長慶の家臣の和田新五郎が鋸挽（のこぎりびき）された。また、1572年に、織田信長が朝倉義景の密使を焚殺した。豊臣秀吉が力を手に入れてから、さらに戻橋辺りを利用する。秀吉がそこで1590年に北条氏政と氏照兄弟、1591年に茶人の千利休、1592年に島津歳久、の首をさらした[40]。1597年には、秀吉のキリスト教禁教令のもとで、キリスト教殉教者の日本二十六聖人が左の耳たぶを切り落とされ、市中引き回しとなった[41]。

秀吉の時代には、戻橋が伝説で描かれたような、不思議で怖い場所よりも、現実的に死と関わり怖い場所になった。一条戻橋の周辺が首さらしの場にされた理由は、前からそこで刑罰が行われた場所だったことと、戻橋は当時の京都の中心地である秀吉の邸宅の聚楽第近辺にあり、最も交通量が多い場所だったことである。聚楽第の東側にある堀川より東には、大名の屋敷が並んでいた[42]ため、身分の高い人もその橋を渡っていた。豊臣秀吉に逆らえば、このように終わるということを秀吉はアピールしたかったことが推測できる。

---

36 同上。
37 高橋1992: 8。
38 か舎・菊池1999: 35。
39 高橋1992: 7。
40 足利1994: 66-67。
41 晴明神社2002: 19。
42 足利1994: 70。

一条戻橋は、婚礼に関わる俗信の場所にもなった。結婚式に向かうときに、花嫁は、この橋を渡ってはいけない習慣があった。結婚した娘が実家に戻ることは好ましくなかったから、「戻る」ことをイメージさせる一条戻橋を、結婚の日に避けていた[43]。この俗信は、死や恐怖と関係がなく、単なる橋名から来ていると言える。始まりは、徳川家康の孫に当たる徳川和子（後の東福門院、1607－1678）から来ていると考えられる。彼女が、後水尾天皇（1596－1680）と結婚する日に、泊まっていた二条城から戻橋を渡って、御所に向かった。橋の名前がよくないと判断され、この日のために「万年橋」に変えられた[44]。

また、戦争に出征する兵士が戻橋を渡ると無事に生還ができると信じられていた。人が橋で集まり、軍歌を歌い、息子の無事を祈る母たちが見送っていた[45]。その習慣も、橋名と関わっているが、戦いに出かける男たちの生死とも強くつながっている。夫や息子を失うのが怖くて、悲しむ母や妻たちが、「死んだ人を戻せる」という戻橋の不思議な力に希望を託していたことも考えられる。その意味では、一条戻橋のイメージが江戸時代前のイメージに戻り、愛する人と再び会える希望を与えてくれる場所と解釈されたのだろう。

現代の一条戻橋は、有名な観光地となり、毎日観光客が訪れる場所となってきた。以前は、あまり人気のない暗い場所だった。そのため、戻橋の観光がここ10年の間に始まったと思われているが、実は名所としての戻橋の歴史はさらに古い。

京都の観光は、江戸時代に始まるし、同じ時期に最初の案内図会が作られる。それは、1780年に出版された『都名所図会』である。続編と共に名所図会の人気がでることと、全国の名所図会が作られることのきっかけとなった。『都名所図会』には、有名な寺社が紹介される一方、橋と川の情報も載っている。一条戻橋も、戻橋の名前で紹介され、橋を見せる絵も付いている。紹介文では、安陪晴明が十二神将（式神）をこの橋下に鎮め、事を行う時に呼んで使っていたと、占いをする時には、その神将がかならず人に物事を託して告ぐことが記されている。橋名の由来として、三善清行の蘇生伝説が挙げられている。最後には、戻橋が洛陽で名橋であると書かれている[46]。絵（図1）の方には、平安時代の歌人だった和泉式部の歌「いづくにも帰るさまのみ渡ればやもどり橋とは人のいふらん」（どこかに帰る様子の人だけ渡るのでもどり橋と人が言うだろう）と、婚礼の嫁入りがこの橋を嫌うことが書かれている。または、逆に旅行に行く時や、他人に物を貸した時には、戻ってくるように戻橋を通った方が良いと記されている。

18世紀に、一条戻橋が、安倍晴明と関わっているところ、占いするところ、三善清行が蘇生したところ、つまり平安時代とつながりの強いところとして紹介されている。晴明の式神と占いの話があの世からの蘇生伝説より先に紹介されることから、戻橋は不思議なことが起こり、不思議な力が宿る場所としてアピールされていたことが考えられる。絵の方にも、和泉式部の歌を使うことで、平安時代とつながりが

---

43 晴明神社2002: 20。

44 「徳川和子の入内」京都市 情報館のサイトより（http://www.city.kyoto.lg.jp/）2013年09月18日。

45 晴明神社2002: 20。

46 都名所図会研究会1967: 18。

強調され、嫁入りや、旅立ちや、ものを貸すときのことを書いて、読者の当時と関係が作られる。『都名所図会』は、売り物として作られたから、歴史・伝統とつながりがアピールされている。それでも、不思議とやや怖い話を使うことが、当時の旅人もそのような話を好んでいたと推定できる。つまり橋の力を、本気で信じていた人はいないが、遊び心と好奇心の面では、魅力的に見えたのだろう。

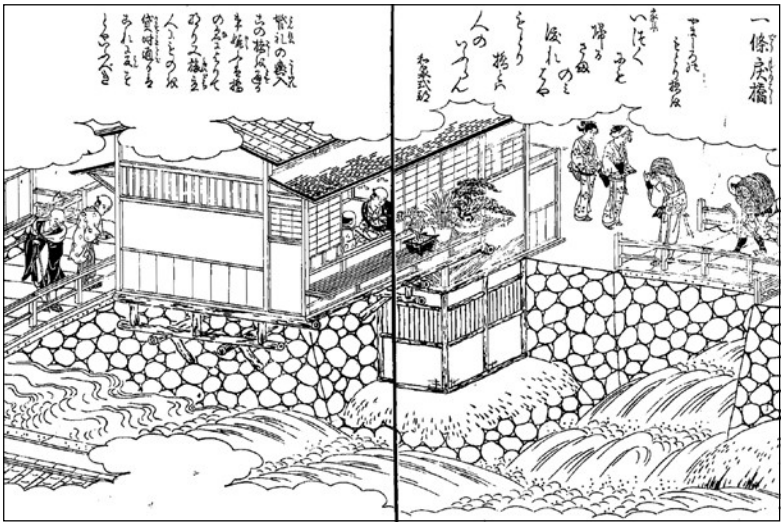

図1　『都名所図会』の一条戻橋

明治時代には、国と知識人の政策で京都が日本の伝統文化「みやび」の中心にされた。建物や知名を平安時代の文化と結びつける傾向があり、一条戻橋でもそれが見られる。1895年に、平安遷都の千百年紀念祭と第四回内国勧業博覧会に合わせ、的場麗水編の『京都名所独案内』という案内書が出版された。そこには、寺社仏閣や美術が主に紹介される中、戻橋についての記述もある。橋の紹介では、三善清行の蘇生の伝説が書かれ、橋名の由来として挙げられている[47]。非科学的である占いと強く関わる安倍晴明や迷信の類に入る嫁入りの話が省かれた。平安文化と関わり、僧侶であった息子の強い宗教心と、親に対する心による奇跡的な蘇生を描く話の方が、アピールしようとした「みやび」の文化にもっと当てはまっていたのだろう。このような紹介で、日本が大きく変化する明治時代でも、人が蘇る場所としての一条戻橋が、京都の大切な観光地に決められた。

一条戻橋の近くには、織物と染物で有名な西陣があることも大切だと考えられる。歴史都市の京都を作り上げるときに、西陣織が高く評価され、日本文化の貴重な産業と思われた。戻橋が架かっている堀川に、西陣の職人が染物を流していたから、その産業にとっては、川が不可欠なものだった。染料の影響で、川が

[47] 的場1895: 9-10。

透明ではなく、色が付いていた。そのまま南に流れ、一条戻橋の下を通っていた。橋から見た色の付いた川が、その場所をまた幻想的な場所に変えていた。

19世紀と20世紀にかけて、京都は、観光地として有名になり、列車の普及で、修学旅行から、個人の旅の目的地となってきた。1924年に、日本の初めての旅行雑誌『旅』が発売され、1926年4月号に、御室瓢之介作の「戻橋」[48]という一条戻橋についての初めての記事が載せられた。ほぼ同じ時期、1925年3月22日に東京放送局から日本初のラジオ放送が行われた[49]。ラジオは、新聞より情報の伝達が早いため、ますます普及した。1930年代に入ってから、ニュースや天気以外にも、文化的な内容が増えていった。そのころの新聞には、ラジオ欄で番組の紹介が行われ、歌舞伎の話も放送されていた。朝日新聞を見る限り、1931年から1941年にかけて、『戻橋』という話が毎年1度か2度くらい放送されていた[50]。その話は、そもそも後半の『茨木』が1883年に、前半の『戻橋』が1890年に、逆の順番で河竹黙阿弥（1816ー1893）によって作られ[51]、平安時代の渡辺綱と、女に化けた鬼の出会いと、その鬼の腕を切り落とし、鬼の腕を得る伝説を描いている。後半では、伝説の続きが明かされ、安倍晴明の勧めにより7日間閉門し、慎んでいたところ、養母に化けた鬼がやって来て、切られた腕を取り返したと描かれている。

この歌舞伎の話は、平安遷都の千百年紀念祭と、第四回内国勧業博覧会のときに既に作られており、上演されていたはずなのに、正式な案内書の『京都名所独案内』を編集した的場麗水が、渡辺綱と鬼の話に触れていない。その伝説が『都名所図会』が作られるときにも挙げられておらず、『京都名所独案内』にも登場しないことから、それほど有名ではなかったと推定できる。それでも、明治時代の歌舞伎にされ、その後ラジオで全国にも放送されるようになった。つまり伝統文化を明治にアピールしようとした人たちにより、この伝説がイメージに合わない俗信の扱いをされたのかもしれない。それにもかかわらず、一般人の間でかなり知られていたのだろう。そのころの戻橋は、あの世につながる怖い場所や、不思議な力が宿る場所として見られていなかったと考えられる。近代化する京都には、そのような橋のイメージは大昔の伝説に過ぎなかったが、民衆にとっては、橋とその話は、娯楽として訪れる場所であり語る物語だったのだ。

一条戻橋が、再び人気の旅行雑誌に登場するのは、最初に紹介した1992年11月号の『るるぶ』である[52]。「ミステリー・スポットガイド　京都トワイライトワールド」という記事で、「教授」が「女子大生」に、京都の怖い場所を教えていく設定となっている。京都の様々な歴史的な場所の中では、戻橋も挙げられる。橋は、まず三善清行の蘇生の場所として紹介され、安倍晴明が式神を隠した場所や、占いが行われた場所として「教授」の話に出てくる。さらに、伝説のみに集中せず、首さらしをする場所としても紹介されている。記事のタイトルだけでも、著者が京都を怖くて暗い場所として見せようとしているし、その不思議さと、怖さで遊んでいることも

---

48 日本交通公社 旅の図書館（http://www.jtb.or.jp/）2013年09月23日。
49 佐藤2010: 166。
50 朝日新聞戦前紙面データベース。
51 歌舞伎のおはなし（http://ohanashi.edo-jidai.com/kabuki/index.html）2013年09月19日。
52 二十一世紀社1992: 66。

ある。戻橋の場合、遊びでは昔の伝説を利用するが、生々しく、リアルな怖さを強調するために、豊臣秀吉時代の処刑所のことを載せてある。それでも、なぜか著者は渡辺綱と鬼の腕の伝説についてまったく執筆していない。

図2 第二次世界大戦前の一条戻橋（撮影：黒川翠山）

ほぼ同じ時期に、小松和彦が「魔界都市」京都を提唱し、それ以降、京都を新しい目で見ようという動きが始まる。近かった1994年の平安建都1200年記念祭がそのきっかけの一つとなった。それ以降、京都の「魔界スポット」に興味を持つ人が増えていく一方、1995年に一条戻橋が京都市によって架けなおされてしまう。それまでに石造りの戻橋（図2）は、何となく伝説の舞台に見えたのだろう。だが、工事後の橋は、コンクリート製で、昔と比べると二倍の広さになった。上にアスファルトの道路がしかれ、おもむきを完全に失ってしまった。さらに、下に流れていた堀川が、戦後（1945－55）の川整備から少しずつ消えてしまい、橋を架けなおすころには、完全にかれてしまった[53]。古い戻橋が、近くにある安倍晴明を祀る晴明神社に運ばれ、境内に実際の部材を使って再現された。1998年に、堀川を戻す地域の人々の運動が始まり、2002年から堀川水辺環境整備が開始した。川に水を戻し、川底に公園を作る工事が2009年に完成し、現在夏中にイベントを行う場所にもなった[54]。一条戻橋もその空間に取り入れられ、橋の下に下りることもできるようになった。そうすることで、この橋が完全に不思議さを失うはずだった。

---

[53] 門脇・朝尾2001: 50。

[54] 堀川水辺環境整備構想（http://www.city.kyoto.jp/kensetu/kasen/kankyo/horikawa/index.html）2013年08月31日。

図3　晴明神社に再現された一条戻橋と式神の像

戻橋と安倍晴明の関わりは、晴明が橋の下に式神を隠した伝説のみであったが、その関わりが近頃の戻橋が全国で有名な観光地になったきっかけになった。晴明神社は、一条戻橋より北方にあり、安倍晴明の邸宅跡にも[55]、千利休の邸宅跡にも当たると言われている。神社は晴明が死んでから、一条天皇の命で作られた。健康で長生きをした安倍晴明は、人間とは思えない不思議な力を持つ者に見えたことから、死後、稲荷大明神の化身だと判断された[56]。したがって、当時の晴明神社は晴明稲荷社として知られるようになり、病気を治す神として信仰が栄えていた。時代によって小さくなったり、大きくなったりしたが、第二次世界大戦後から、神社は回りの土地を買収し始め、今の形になったのは1997年である[57]。古い一条戻橋が晴明神社に運ばれ、再現された理由はいくつか考えられる。まず1995年には、境内がすでに広く、神社と祀っている安倍晴明をもっと魅力的に見せるために、石造りの橋が置かれたことが考えられる。安倍晴明をさらに強くアピールするには、神殿以外にも、晴明の伝説とつながるものが必要だった。旧戻橋を再現し、式神の像（図3）を隣に置くことで、観光客が実際に訪れ、触れる記念碑ができた。それ以外の理由としては、神社と地元の人々にとって古くて魅力的な橋を壊すのは、もったいなく、保護する形で神社の境内に入れられたことも伺える。どの理由でも、結果としては、一条戻橋がさらに安倍晴明と結ばれ、逆に晴明の経由でイメージされるようになった。

---

[55] 本当の邸宅跡は、一条戻橋より東、今の上京区中立売通新町に位置し、京都プライトンホテルの駐車場と民家辺りに当たる（平安京探偵団[山田邦和の報告] http://homepage1.nifty.com/heiankyo/index.html　2013年08月31日）。

[56] 晴明神社2002: 21。

[57] 晴明神社2002: 25。

2000年ごろには「晴明ブーム」が起こり、それに合わせて、戻橋の知名度も高くなった。現在の安倍晴明のイメージとそのブームの始まりは、1988年の夢枕獏が書いた小説の『陰陽師』(文藝春秋、1988年)の出版に当たる。小説『陰陽師』がまだ続き、2012年の時点では、シリーズが13巻目を迎えた。90年代に小説が岡野玲子によってマンガ化(『陰陽師』スコラ、白泉社、1993－2005、全13巻)され、安倍晴明の人気が高くなったと言える。その二人は、歴史上のものとまた違った、新しい晴明像を生み出した。小説とマンガを面白くするには、安倍晴明を2、30代に若返らせ、陰陽道を使う探偵のような人にした。顔が美少年のようで、元気いっぱいの姿である。他の陰陽師と腕比べをしたり、友達の源博雅と様々なアドベンチャーをしたりする。あまりの人気で、夢枕縛の小説を原作にするテレビドラマ『陰陽師』(2001年4月－2001年6月)がNHKで放送された。同年に、同じく小説は映画化もされ、『陰陽師』(監督:滝田洋二郎)が2001年10月に公開された。また続編の『陰陽師2』も2003年10月に公開された。以上の作品の中で一条戻橋が登場するから、人々から見たら、主に『陰陽師』の舞台として捉えるようになったことが考えられる。なお、映画などに写っている橋の姿は、実際の戻橋と異なる。そのため、晴明神社で再現されたものの方は、皆が期待している不思議で、恐ろしい式神の棲みかになり、鬼が現れる戻橋に近いと言えるのだろう。

小説『陰陽師』と、それをもとにしたマンガ、テレビドラマ、映画の影響により、安倍晴明に付随して一条戻橋のモチーフを使う他の作品も作られている。2004年から、結城光流の『少年陰陽師』(角川書店)という小説が発売され、2012年には36巻が出版された。この小説は様々なメディアで使用され、2006年にアニメ化された(2006年10月－2007年3月放送)。その他に、2008年に発売された椎橋寛の『ぬらりひょんの孫』(集英社)のマンガにも、安倍晴明が登場する。このような作品は、安倍晴明の伝説に新しい風を吹き入れ、その舞台になる一条戻橋を見せ、新世代に伝えていく。

安倍晴明のブームとともに一条戻橋について、または、全体的に京都の「魔界」についての本やガイドブックが、2000年代に入ってから増加する。その時期にも、旅行雑誌『旅』の88年間の歴史の中で、戻橋が再び、そして最後に紹介された。それは、2003年2月号のことである[58]。そこの記事では、著者の森本哲郎が、小野小町と縁の地について語りながら、一条戻橋の伝説を紹介している。安倍晴明が橋の下に式神を隠したことが最初に、続いて橋のたもとで占いが行われたことと、橋名の由来が三善清行の蘇生にあることも登載された。渡辺綱が、鬼を退治する伝説が、今回使った案内書と旅行雑誌で、初めて挙げられている。それ以外の話も書かれ、たもとに「柳風呂」という娼家が建ち、そこに綱という名前の遊女がおり、江戸時代の俳人と画家だった与謝蕪村(1716－1783)が彼女と親しかった、と著者の森本哲郎が述べている[59]。安倍晴明の伝説が真っ先に出ることは、晴明ブームの時期だと分かる。一条戻橋は、歴史的だが、不思議で面白い場所として紹介されている。さらに、著者が安倍晴明と陰陽道のイメージに娯楽の要素を増

[58] 森本2003: 135。
[59] 同上。

やそうとしたと言える。安倍晴明の伝説の舞台にされている傾向の中で、渡辺綱と鬼の話を思い出させているし、その話は、江戸時代にも知られ、遊女によって遊びに使われたことを教えてくれている。著者から見ても、一条戻橋は少し神秘的だけれども、同時に、娯楽や癒しが求められる場所でもある。

安倍晴明ブームから実際に利益を得ている晴明神社は、そのブームを積極的に支えている。戻橋を再現するだけではなく、境内にさまざまなものを置くことで不思議な異空間のイメージを作っている。または、インターネットで2003年に神社の正式なウェブサイトを始め、そこで境内を詳しく案内している[60]。旧一条戻橋の写真も、その傍らに立っている式神の写真も載せられている。

現代の一条戻橋は、昔のおもむきがない橋に変わったが、形は旧橋に似ており、堀川の整備で、北側に木が茂り、少しだけ味が醸し出されている。そこ西詰にも案内の駒札が立っており、三ヶ国語で、三善清行の蘇生伝説と、渡辺綱が鬼女に出会った伝説が紹介されている。逆に安倍晴明についての情報がまったく載せられていない。それは、戻橋が陰陽師の舞台だけではなく、様々な不思議な伝説の舞台であると重視したいからであろう。現在駒札を作り立たせるのは、京都市の観光MICE推進室である。そこには、駒札担当がいるが、問い合わせしたところ、正式にデータベースには一条戻橋の駒札についての記録が見つからないと言われた。町の自治会が自ら作るところもあるらしいが、そのときには「京都市」と最後に書かない。一条戻橋の駒札は、京都市が作っている正式な形で、最後には京都市と書かれている。誰によって作られ、いつ立てられ、内容は誰が決めたかといった情報が、京都市観光MICE推進室にはない。

3. まとめ

京都は、古都京都として世界遺産に登録され、日本人から見ても、外国人から見ても、日本伝統文化の中心地である。1200年前に作られた都は、19世紀まで天皇家が居住していた場所であったため、ずっと国の中心だと思われがちである。知識人や芸術家が集まる場所であったが、時代によって京都の範囲・姿・雰囲気が違っていた。観光地としての京都も、ヨーロッパより早く、江戸時代から観光されるようになっていた。18世紀に、初めての案内書である『都名所図会』が出版され、京都を旅行者に宣伝するようになったことが分かる。19世紀後半になると、京都は、国の政策により、伝統文化が残っている都市にされ、他の時代を無視し、平安時代が強くアピールされるようになった。その時に形成された京都のイメージは、現代まで続いている。一方で、京都は、伝統文化の町だけではなく、それぞれの時代の住民が作った文化の町でもある。その人たちが、上品な文化よりも、日常に起こっていたことを伝説にしたり、うわさにしたりした。疫病がはやり、洪水が続き、町内に悪いことが起こると、それは、神、怪異現象、鬼、幽霊などの仕業にされ、退治したり鎮魂したりする人がいた。このようなことが、京都の住民

[60] Internet Archive: Wayback Machine（http://archive.org/web/web.php）2013年08月31日。

の間に伝わる伝説に変わり、時代を超え、変化しても、ずっと存在し続けてきた。このような伝説に関わる場所が京都に多く、人々に守られてきたと言える。

一条戻橋は、作られたときから、都と外の世界の境目にあり、異空間・あの世とつながる不思議な場所と思われていた。平安時代には、墓地への道であったため、現世と死者の世界が交わり、二つの世界が行き来できる場所であった。三善清行が蘇生したことから、名前が確定し、永遠の別れの所でもあり、失った大切な人と再び出会える所でもあった。寂しくて、怖いところでも、希望を与えてくれる場所だった。そのころには、一条戻橋は知名度の高いところとなっていた。このイメージが、文学で残された伝説として現代にも知られている。鎌倉時代には、戻橋が寂しいところというよりも、不思議な力が宿り、あの世とつながっているので、占いができる場所と信じられていた。または、鬼に出会える場所や、式神が棲みかにした場所と思われていた。そのため戻橋は、民衆から恐れられていたと推測できる。しかし、英雄視された人間で、天文学と陰陽道の専門家だった安倍晴明は、不思議な力を持ち、一条戻橋に隠した式神を支配できる者とみなされた。また、武人だった渡辺綱も、あらゆる魔物を退治するヒーローにされた。それは、この時代の戻橋の特徴である。そのイメージが支えられ、次の世代に伝わったのは、『平家物語』などの軍記物語に伝説が収録されたからであろう。物語を読める貴族の中だけでなく、口伝えにより民衆の中でも同時に伝説が語り伝わっていった。

鎌倉時代にも、室町時代にも、一条戻橋の辺りは、かなり有名だったと言える。健康を与える晴明稲荷社も橋の近くにあり、橋のたもとに陰陽師たちが住みつき、人のために占ったりした。晴明社の参拝者と占いを求めて来る人が多かったと考えられる。

安土桃山時代になると、一条戻橋周辺が神秘的なところというよりも、現実的に恐ろしい場所に変わった。織田信長のときも、豊臣秀吉のときも、一条戻橋は、実際に人が死ぬ場所となった。特に後者では、そこが死刑と首をさらす所となり、犯罪者だけでなく、秀吉の敵や秀吉に逆らった人がそこで殺され、彼らの首が橋のたもとでさらされるようになった。一条戻橋が秀吉の邸宅の聚楽第と大名の屋敷の間に当たり、堀川を越えて必ず通る場所だった。そのため、秀吉が権力を見せ付けるために、そこで首をさらしたり、刑罰を行ったりした。地理的な理由で、一条戻橋は、人がよく渡り、有名な橋だった。実際に死と関わる場所なので、人々の間では、不愉快で怖い場所と思われていたと考えられる。そのころの戻橋は、死を思わせる暗くて、怖い場所である。

その次の時代は、京都が初めて観光されるようになる江戸時代である。江戸時代の人たちは、戻橋には、怪異現象が起こり、あの世から来たものに会えるイメージを持ち、秀吉が人を殺していた死のにおいがする怖い場所のイメージも持っていた。橋の名前も、縁起が悪いと思われ、徳川家康の孫の徳川和子が嫁入りするときによくないから、彼女が通れるように一時的に橋名は変えられてしまった。だが、そのイメージもまた変化し、平安時代と鎌倉時代に戻り始めた。1662年に浅井了意（？ ～1691）作の『安倍晴明物語』が刊行され、安倍晴明に関わる伝説が江戸時代の言葉に合わせ、記されている。読みやすく、娯楽を目的とするその仮名草子は、平安時代から作られていた様々な安倍晴明を描く説話を組み合

わせて作られたものである。そこには、一条戻橋が、晴明と関わる伝説の舞台として出てきている。その著作の出版は、当時の人々が関心を持っていたことを教えてくれる。浅井了意が晴明と戻橋をまず皆に思い出させたのか、すでに京都の人々は、その話に興味を示し、浅井了意が需要に答えただけなのかは分からない。『安倍晴明物語』が『蘆屋道満大内鑑』(通称で「葛の葉」)として1734年に人形浄瑠璃の話にされ、1735年に歌舞伎の芝居にされた。その芝居では、一条戻橋が平安時代のイメージで見せられていた。「葛の葉」の話が人気を集めていたから、当時の人へ影響力があったと考えられる。それ以降、江戸時代の人々が戻橋を不思議で面白い場所として見始めたのだろう。1780年に刊行され、都を訪れる人向けの『都名所図会』には、寺社と並んで一条戻橋が紹介されている。その戻橋は、式神が住み、占いが行われ、人が蘇るところである。少し怖くて、珍しいことが起こる場所であるため、観光客は、異空間に入り、普段と違う体験をし、人間の支配下にある魔物と会えるような気持ちになる。一条戻橋を訪れることで、人々は、日常生活から開放され、再生されると同時に、娯楽を感じていた。その一方で、京都人がまじめに一条戻橋のことを考えていなかったと言える。橋のたもとに娼家があり、そこの遊女の芸名は「綱」だったことから、渡辺綱と鬼女の伝説を、商売と遊びのねたにしていたことが分かる。江戸時代の戻橋観光は、このような不思議さと、作られた恐怖の経験と娯楽が混交したものになっていたと考えられる。

日本が近代化する明治時代に、京都は日本伝統文化「みやび」の象徴になる都市に選ばれた。長い歴史を世界の前で見せるために、京都は無理やりに平安時代と結ばれた。そのため、平安時代と関わりが薄いか、平安朝廷の文化のイメージと違う伝説や場所が、国家や京都市によって重視されていなかった。その中で、一条戻橋は忘れられておらず、国家が開催した平安遷都千百年紀念祭と、第四回内国勧業博覧会に合わせ作られた正式なガイドブック『京都名所独案内』に紹介されたが、平安時代と深い関係を持つ場所として、息子の愛と、宗教心の力で蘇生した三善清行の平安時代の最古伝説しか紹介されていない。これで、国家が初めて正式に一条戻橋を大切な観光地と認めたが、三善の蘇生の話以外の話は、求められていた上品な「みやび」文化に合わなかったのだろう。同時に、橋に関わる伝説と歴史が、一般人の間で記憶され、生き続けてきた。一条戻橋は、また19世紀末に歌舞伎で使われ、渡辺綱と鬼女の伝説に基づく話の舞台とされ、二つの世界が混合し、怪異現象が起こる場所として広く紹介されるようになった。その歌舞伎の話は、現代まで上演され続け、20世紀半ばごろまでは、ラジオで全国に放送されていた。その結果、知名度は高かったが、1990年代までは、観光地として人気を集めていなかった。京都市は、戦後から一条戻橋の下に流れる川を枯渇させ、周辺のおもむきを気に留めなかった。京都の「みやび」のイメージにとって、俗信や伝説と関わり、血が流れた場所があまり好ましくなかったのだろう。それが1990年代に入ってからやっと変わる。注目されていなかった京都の場所が、特に学者の中で研究され始めた。歴史的に死と関わり、鬼や幽霊などとつながる所は、京都を考えるときに注目しなければならないと述べられるようになった。1994年に開催された平安建都1200年記念祭に合わせ、小松和彦がその新しい京都の見かたを「魔界都市」京都と呼んだ。

京都の「魔界」を案内するガイドブックと本が出版され、人々の間で少しずつ人気を集め始めた。特に陰陽師の安倍晴明が小説、マンガ、テレビ、映画で使われるようになり、日本の現代大衆文化に入れられた。晴明ブームが2000年代に起こるとともに、一条戻橋も、注目を浴びるようになった。晴明神社に参拝するときに、観光客が晴明縁の地として一条戻橋を観光するようになった。しかし、橋を実用化しようと思った京都市が、橋をアスファルトがしかれた新しいものに架け替えた。したがって伝説の舞台に見えない場所となってしまった。旧戻橋は、近くの晴明神社によって境内で再現された。さらに、隣に安倍晴明の式神の像が建てられた。その結果、本物の橋はなくなっても、京都の歴史の中でずっと存在していた一条戻橋の石碑ができた。今までは伝説で描かれた橋と、実際に京都にかかっている橋は、同じものを指していたが、現在は伝説上の橋と、現実的で実用的な橋に分けられてしまった。堀川に架かっている本物の橋は、これからなくなっても、晴明神社の石碑が存在し続けるのだろう。また、一条戻橋が二つに分けられたことで、不思議で怪異現象が起こるイメージは、堀川に架かる橋より切り離された。そして、近所に住む人々は、あの周辺は鬼が現れ、あの世とつながっていると思うこともなくなったのであるのだ。

おわりに

現代の一条戻橋の人気は、上からの働き、つまり国家や京都市の政策として現れてきたのではなく、下からの働きから出てきた。晴明神社が存在し続けることで、安倍晴明が皆から忘れられず、学者と、小説家と、漫画家と、その人たちの仕事に影響された人々のおかげで、一条戻橋のようなところが京都の観光地図と人々の意識の中に戻ってきた。

京都の一条戻橋は、伝説により語られ、『都名所図会』により観光地として紹介され、20・21世紀のメディアによってもてはやされた。それにより、不思議で、怖い場所だが、危険でないイメージが確定され、日常は単調でつまらないと思う観光客は、それを確かめに、現実から逃避するために来るのだと言える。一条戻橋に来ることで、伝説上の世界と現実の世界が混合することを期待し、異空間に入り、珍しくてやや怖い気分を味わい、体験して楽しんでいる。一条戻橋は、江戸時代の観光客も、現代の観光客も、このような気持ちにさせている。それと同時に、戻橋は、不思議な力が存在する異空間だからこそ、昔から亡くなった人と再会ができ、死に行く者が無事に戻れる希望を与えてくれる場所でもある。

参考文献

- 足利 健亮 編1994。『京都歴史アトラス』。中央公論社。
- 綾辻 行人・京都魔界倶楽部2009。『京都魔界地図』。PHP研究所。
- 丘 眞奈美2005。『京都「魔界」巡礼 写真と地図でたどる“魔の名所”完全ガイド』。PHP研究所。

- か舎・菊池昌治1999。『京都の魔界をゆく—絵解き案内』。小学館。
- 金田 章裕 編2007。『平安京—京都 都市図と都市構造』。京都大学学術出版会。
- 川合 章子2003。『安倍晴明の世界：陰陽道と平安京』淡交社。
- 京都市 編1980。『京都の歴史 第八巻 古都の近代』。京都市史編さん所。
- 『京都魔界めぐり』改訂版1998。宝島社。
- 『京の怪談・七不思議』1980。京を語る会。
- 『広辞苑』第五版1998。岩波書店。
- 小松 和彦2002。『京都魔界案内—出かけよう、「発見の旅」へ』。光文社。
- 斎藤 英喜2004。『安倍晴明—陰陽の達者なり—』ミネルヴァ書房。
- 佐藤 卓己2010。『現代メディア史』。岩波書店。
- 佐藤 弘夫2008。『死者のゆくえ』。岩田書院。
- 晴明神社 編2002。『安倍晴明公』。講談社。
- 高野 澄1997。『京都・伝説とお伽噺の謎』。京都新聞出版センター。
- 高橋 昌明1992。『酒呑童子の誕生—もうひとつの日本文化』。中公新書。
- 竹村 俊則1991。『京都ふしぎ民俗史』。京都新聞社。
- 田中 貴子2003。『安倍晴明の一千年：「晴明現像」を読む』。講談社。
- 二十一世紀社1992。「ミステリー・スポットガイド 京都トワイライトワールド」。『るるぶ』。11号。
- 的場 麗水 編1895。『京都名所独案内』。吉野家。（国立国会図書館デジタル化資料 http://dl.ndl.go.jp/）
- 丸山 宏・伊從 勉・高木 博志 編2008a。『近代京都研究』。思文閣出版。
- 丸山 宏・伊從 勉・高木 博志 編2008b。『みやこの近代』。思文閣出版。
- 都名所図会研究会 編1967。『都名所図会（全）』。人物往来社。
- 村上 健司2007。『京都妖怪紀行』。角川書店。
- 森本 哲郎2003。「ぼくの小町紀行—美女伝説を追って第2回「一条戻橋」幻想」。『旅』。2号。
- 門脇 禎二・朝尾 直弘 編2001。『京の鴨川と橋—その歴史と生活』。思文閣出版。
- 古代学協会・古代学研究所 編1994。『平安京提要』。角川書店。
- Blacker, Carmen 1984. “The Religious Traveller in the Edo Period”. *Modern Asian Studies*, Vol. 18 No. 4, 593-608.
- Reider, Noriko T. 2003. “Transformation of the Oni: From the Frightening and Diabolical to the Cute and Sexy”. *Asian Folklore Studies*, Vol. 62 No.1, 133-157.
- Reider, Noriko T. 2007. “Onmyōji: Sex, Pathos, and Grotesquery in Yumemakura Baku’s Oni”. *Asian Folklore Studies*, Vol. 66 No.1-2, 107-124.
- Reider, Noriko T. 2013. “Tsuchigumo sōshi: The Emergence of a Shape-Shifting Killer Female Spider”. *Asian Ethnology*, Vol. 72 No.1, 55-83.

デジタル資料:
- Internet Archive: Wayback Machine（http://archive.org/web/web.php⊠2013年08月31日
- 朝日新聞戦前紙面データベース
- 歌舞伎のおはなし（http://ohanashi.edo-jidai.com/kabuki/index.html⊠2013年09月19日
- 京都市 情報館（http://www.city.kyoto.lg.jp/）2013年09月18日
- 日本交通公社 旅の図書館（http://www.jtb.or.jp/）2013年09月23日
- 平安京探偵団（山田邦和の報告）（http://homepage1.nifty.com/heiankyo/index.html）2013年08月31日
- 堀川水辺環境整備構想

（http://www.city.kyoto.jp/kensetu/kasen/kankyo/horikawa/index.html）2013年08月31日

画像:
- 都名所図会研究会 編1967。『都名所図会（全）』。人物往来社。
- 京都北山アーカイブス　京都府立総合資料館所蔵資料データベース（黒川翠山撮影写真資料）http://www.pref.kyoto.jp/archives/index.html

English Summary of the Article

Marcin Tatarczuk

Kyoto Travels and Visits to the "Other Side". History and Image Transition of the *Ichijō Modoribashi* (Bridge of Returns)

It comes as no surprise that the Japanese ancient capital, Kyoto, world-famous for its centuries-long history and rich culture, is among the most visited cities in the country, enjoyed by both domestic and foreign tourists alike. Many of them come to Kyoto to experience the traditional culture of Japan, but recent years have seen the emergence of a new type of tourist – one that explores places connected with the "Other World" or the supernatural, a phenomenon known in Japanese as *makai kankō* or *makai meguri*. The purpose of this paper is to describe how Kyoto became a symbol of traditional Japanese culture through various local government policies, especially in the 19th century. It also shows that the recent trend of visiting the supernatural-related spots reflects how Kyoto was perceived, and how its image evolved during the 20th century. The paper focuses on one particular example of the *Ichijō Modoribashi*, a bridge believed to stand in the exact same place as when it was first built in the Heian period. By tracing the roots of legends concerning the bridge, one can understand how the image of this spot has changed, and how it is connected with certain events in history. Currently, the *Ichijō Modoribashi* is depicted as a place closely related to the Japanese legendary astrologer, Abe no Seimei, a popular character found in numerous Japanese novels, comic books, and movies. The sightseeing history of the *Ichijō Modoribashi* is discussed with reference to *Miyako meisho zue (Pictorial Guide to Famous Places in Kyōto)* published in 1780 by Akisato Ritō, in the earliest Japanese travel magazine, *Tabi* (1924-2012), and the most popular travel guide book in Japan, *Rurubu* (1984 -), issued by JTB Publishing.

Key-words: Kyoto, *ichijō modoribashi, makai*, Abe no Seimei, travel